園のおたより

第　３　号

令和６年６月

埼玉大学教育学部附属幼稚園

遊び着

園長　関　由起子

先日、2組さんの遠足に連れて行ってもらいました。別所沼公園で移動中の時、ピクニックをしていた子連れのお母さんが、「みて、あの服、かわいい。どこの幼稚園？」と園児の遊び着を指して言いました。「埼大附属幼稚園よ。かわいいでしょ。形は同じだけど、色や柄にはいろいろな思いが込められていて、一人一人違うのよ。素敵でしょ。」と声を出して言いたかったのですが、大人げないかなと思い、ぐっとこらえて通り過ぎました。そして、ある園の先生がこどもたちに「着替えがないから、汚さないようにね」と伝えていました。またまた心の中で「附属幼稚園は遊び着だから、汚れてもかまわないのよ。遊び着の着替えも持ってきたし、汚れるのを気にせず思いっきり遊べるのよ。」と思いました。

この素晴らしい遊び着ですが、こどもたちにとって難点もあります。それは着替えをしなければならないことです。特に1組さんは、「着替えたくない」、「着替えさせて」などと毎日いろいろなやり取りがあります。先生たちは、こどもが自ら着替えが出来るように様々に工夫しています。私もたまにお着替えに参加するのですが、いつも思い出すのが我が娘のことです。0歳から保育園に通っていた娘は、先生たちのおかげでいつの間にか自分で着替えることが出来るようになったのですが、家では「着替えさせて」と甘えモードになります。時間がない私は強い口調で、「自分で着替えなさい」と言ったり、根負けして着替えさせたりしていました。ある日、娘がむっとした顔をして両手を広げて私の前に立ち、「今日はぜんぶやって」と動きません。さすがに娘の真剣さが伝わってきました。そして担任の先生のある言葉を思い出しました。“生まれてからまだ数年しかたっていません。みんな一生懸命着替えていますので褒めてください。そして時には甘えさせてください”。そして、「今日はちょっと疲れて頑張れない日だから、全部やってあげてもいい日なのかな」と思い、赤ちゃんのように全部着替えさせてあげました。娘はとても喜び、この日はとうとう食事も「全部食べさせて」となりました。小学生になっても、このような日があったような気がしますが、今はすでに成人し、鏡の前でどっちの服が似合うかと、1日に何回も自分で着替えるようになりました。

附属幼稚園のこどもたちも、いろいろなやり取りを繰り返しながらいつの間にか自分で着替えるようになります。1 組の時には、いつも「着替えさせて」と訴えていたAくんは、2組になった途端、「自分で出来る」と私の手を払いました。こどものたくましさを喜びつつ、「もう自分で出来るのね」と少しさみしい気持ちになりました。

「楽しい」のおすそ分け

副園長　小谷　宜路

昨年度は、「“遊び”とは何でしょうか」というテーマで研究活動を進め、それを引き継ぐ形で、今年度は「“楽しむ”とは何でしょうか」というテーマで取り組んでいます。砂遊びを楽しむ、かくれんぼを楽しむ、友達との関わりを楽しむ、園生活を楽しむ…、「楽しむ」という言葉は、幼児教育の場でよく使われる言葉の一つです。人が生きていく中には、さまざまな場合の「楽しむ」があり、その時々で「楽しむ」の意味も変わるかも知れません。幼稚園でのこどもたちにとって、どのような「楽しむ」が大切なのか、改めて考え直す一年にしたいと思います。

先日、砂場の砂を戸外用のボウルに入れて、水と合わせて上手に棒で混ぜている人がいました。ふと目が合うと「スープつくってるの」と教えてくれました。もうひと混ぜ、ふた混ぜした後、「おもしろいよ」とこちらに、その大切な作りかけのスープを渡してくれました。素敵なスープづくりを体験させてもらいました。

同じ日、固定遊具の上にまたがって、「この電車、のっていいよ！」と元気な声で周りに呼びかける声が聞こえました。一緒に遊具（電車）に乗っていた友達が「〇〇せんせい、この電車乗って！」と遊具から降りると、“私も先生に伝えなくては”といった嬉しそうな表情で降りて、走っていきました。

もう一つ同じ日、テラスのこちらから、少し離れたテラスの先にいた先生を見つけて、「◇◇せんせい！アブ（のような虫）がいたの」と、一生懸命に伝えています。その後、近くにいる私に「せんせい、アブみにいこう。おっきいアブがいた」と、一緒に虫探しへお誘いをしてくれました。

砂のスープづくりをする人も、電車の運転をする人も、虫探しをする人も、それぞれのこどもたちの中にある「楽しい」気持ちを感じ取ることができます。そして、自分が十分に楽しんだ後は、その「楽しい」気持ちを、誰かに“おすそ分け”してくれるように思います。今回紹介した３つの姿は、自分の「楽しい」を大人（先生）におすそ分けしてくれた姿ですが、こどもたちの遊びでは、友達におすそ分けすることもあります。家では、おうちの人に自分の「楽しい」をおすそ分けすることもあるでしょう。「楽しい」のおすそ分けは、おすそ分けする側も楽しさが増し、おすそ分けをいただいた側も新たな楽しさに出会うことになります。

こどもたちからの「楽しい」のおすそ分けをありがたくいただきながら…、また、私が感じた「楽しい」をこどもたちにおすそ分けしながら…、さらに、こどもたち同士が「楽しい」を分かち合う姿を大切にしながら…、日々の幼稚園生活を「楽しむ」ことに繋げていければと感じています。

クラスだより

１くみ

「友達を感じながら」

園での生活も３か月程経ち、「〇〇先生」「〇〇ちゃん」「〇〇くん」と先生や友達の名前を呼ぶ声が聞こえてくるようになってきました。登園すると、「今日は誰がお休みなの？」と誰が幼稚園に来ているのかをすぐに聞く人もおり、一緒に過ごす人の存在を少しずつ感じているようです。

ある日、室内にあるついたてを電車に見立てて動かしている姿がありました。そこで、新たにダンボールの箱を用意して乗り物にできるようにしてみました。初めのうちは、箱の中に入ってみたり、押して動かしてみたりして遊んでいました。別の日には、積み木を荷物にして車の中に入れ、「宅配便」になりきって荷物運びが始まりました。ままごとスペースからクッションやお皿を持ってきて「おままごとの人に荷物を届けてきます」と荷物の配達をしていました。ままごとの場まで荷物を届けることができると、満足そうに次の荷物を運んでいました。「ままごと（家）」と「宅配便」の遊びの場が繋がったことで、こどもたちの中に新しい楽しさが生まれたのではないかと思います。

使う人によってダンボールの箱は電車にも変身します。電車の運転をしていた人から「レールプールに行きます。乗ってください」とアナウンスがあったので、担任もお客さんとして乗せてもらうことにしました。すると、「次は、ピンク電車に乗ってください」「この電車は大阪に行きますよ」と他の電車（ダンボールの箱）も走り始め、保育室やテラスにたくさんの電車が登場しました。友達が使っている物ややっていることに気付き、「これ楽しそう。だから自分もやってみよう」という気持ちが引き出され、楽しい気持ちが徐々に広がっていくのではないかと思います。

自分のやりたいことに関わる中で、少しずつ友達の遊びの世界も感じながら過ごす姿が見られるようになってきています。友達の存在や友達がやっている遊びを感じながら過ごすことを大切に支えていきたいと思います。

２くみ

「五色の短冊」

保護者参加では、おうちの方と一緒に、２組で楽しんでいることをして遊ぶ姿がありました。自分の「楽しい」がおうちの人と共有できたことや、一緒の時を過ごすことが嬉しかったようでした。おうちの方との２人きりのひとときとして、七夕に向けて短冊を作りました。『たなばたさま』（作詞：権藤はなよ　補作詞：林柳波　作曲：下総皖一）では、「五しきのたんざく　わたしがかいた　お星さまきらきら　空からみてる」と歌います。この歌にある五色も、鯉のぼりの吹き流しのように「五行」に基づいているそうです。「木（木や草花・春の色・青）、火（太陽や灯・夏の色・赤）、土（山や大地・真ん中の色・黄）、金（鉄・金属・秋の色・白）、水（海や雨・冬の色・黒（紫）」を意味しているそうです。選んだ２枚の短冊の色は、もしかしたら今に必要なエネルギーかもしれません。後で、お願い事を描いた短冊をじっくりと読ませてもらいました。その時に、クリストファー・ムーアという作家さんの『こどもたちが魔法を目にするのは、それを探しているからだ』という言葉が浮かびました。２組さんの願っていることも、この言葉の意味することと近いのではないでしょうか。大切なことは、「わたし」が〇〇になりたい、「わたし」は〇〇をしたい、と願うことのように思いました。誰かをコントロールすることではなく、「わたし」が創っていくこれからの「わたしの世界」なのかもしれません。こどもたちや、おうちの方々の素敵な願いを、お星さまが見ていてくれますように…。

花壇のオシロイバナも、夏の太陽の光を嬉しそうにして咲き始めました。美しい花の色は、わたしたちの目や心を楽しませてくれますが、色水でもみせてくれます。オシロイバナの色水を飲み物に見立てて作る姿も見られるようになりました。「きれいだね」と呟いてじぃっと眺めています。他にも赤紫蘇の葉や、身近にある草花の色を試すこともおもしろくなってきたようです。

この時期だからこそ味わえる遊びをたっぷりと楽しみたいと思います。

３くみ

「幼稚園の自然とみんなの楽しみ」

四季折々の恵みが感じられる幼稚園の環境ですが、夏も季節の楽しみがたくさんあります。自然観察園のビワや梅の実は築山のあたりからよく見えて、春から楽しみにしている人がいました。クラスで自然観察園に出かけたときに、まず梅が大きく実っていたので採ってみることにしました。梅はそのままでは食べることができないので、どうしようかと相談すると、2 組の時にカリンでシロップを作ったのを思い出して、ジュースにしたいという人がいました。氷砂糖と梅を交互に入れて、毎日様子の変化を見ながら飲むのを楽しみにしています。そのうちビワの実も色づいてきて、木から直接採って食べることができました。自然のものをそのまま頂くことでおいしさも格別だったようです。

3 組ではもう一つ、みんなで楽しみにしているものがあります。それはみんなで育てている夏野菜やさつまいもの生長です。はじめは「普段食べている野菜って、どこから来ているのかな」という問いかけから始まりました。畑にするために草や石をとったり、うねを作ったりすることもしました。クラスのみんなで種をまいたり苗を植えたりして、最近は当番の活動で水やりをしています。7 つのグループで順番に水やりをする中で、生長や変化に気付く姿があります。当番の活動の後には「実がなっていたよ」「草がいっぱいだったから抜いたよ」と気付きや自分たちで考えて取り組んだことを共有し合う時間をもっています。当番でない人も興味深そうに話を聞いて「草取りした方がいいんじゃない？」「虫が来ないようにするにはどうしたらいいかな」と考えを出し合う姿があります。

初めて実がなったピーマンやきゅうりを収穫して、みんなで分けて食べることもできました。みんなで知らせ合ったり、実際に食べてみたりする中で、野菜を大事にしたい気持ちが高まり、当番で水やりをする以外にも野菜の様子を興味深く見ていく姿が増えています。これから夏に向かっていく中、みんなで生長を楽しみにしていきたいと思います。